

「19世紀イギリス文学合同研究会」報告事項

大野 龍浩
(立正大学教授)

文学研究への関心の希薄化にともなう19世紀英文学個別学会の所属会員減少を打開すべく、新野 緑先生（神戸市外国語大学教授）のご提案により動き始めた合同研究会設立企画。およそ2年にわたる各学会の会長によるオンライン会議と2021年9月18日にオンラインで開催された準備大会を経て、2022年1月にその概要がまとまりました。すでにメーリング・リストでご報告した内容と重複する部分もありますが、以下に改めて要点を整理いたします。

いずれの学会も負担の増加を危惧されているようで、最終的には私たちの当初の希望に近い結果となりました。

1. 参加学会：ディケンズ・フェロウシップ日本支部、日本ハーディ協会、日本ワイルド協会、日本ギaskell協会（2022年1月現在。日本オースティン協会も参加の可能性あり）
2. 開催は2年に1度
3. 年次大会と重ねても可
4. 対面かオンラインかは各学会で選択可
5. 費用は均等割
6. ホスト学会

準備大会（2021）：ディケンズ・フェロウシップ日本支部

第1回大会（2023）：日本ハーディ協会

第2回大会（2025）：日本ワイルド協会 or 日本ギaskell協会

第3回大会（2027）：日本ワイルド協会 or 日本ギaskell協会

来年開催の第1回大会の日程、会場は今年の11月初めにはお知らせできる予定です。研究発表者やシンポジウム・パネラー等選出の要請がなされた場合は、メーリング・リスト等で募集いたします。

ハーディ協会は、ディケンズ・フェロウシップ同様、午前中に協会の年次大会を、午後に合同研究会を開催する方向でプログラムを組まれる模様です。規模の小さい私たちは、ギaskellと各学会の作家を比較するような研究発表やシンポジウムを組むことによって、午後だけで済ませるのも一案かと考えています（具体案については、次期の第19期役員会の判断に委ねることになります）。

今後も会員の皆様のご協力をお願いする次第です。

第33回大会レポート

日時：2021年10月9日（土）

Zoomによるオンライン方式

13:00 開会の辞 日本ギヤスケル協会会長 大野 龍浩（立正大学教授）
総合司会 桐山 恵子（同志社大学准教授）

13:05～13:35 研究発表 司会 榎本 洋（愛知県立大学准教授）
「近く、遠い過去——『克蘭フォード』の時代設定をめぐって」
村上 幸太郎（宮崎公立大学准教授）

13:35～15:55 シンポジウム「エリザベス・ギヤスケル『シャーロット・ブロンテの生涯』再評価」
『シャーロット・ブロンテの生涯』における読みの可能性」
司会・パネリスト：芦澤 久江（静岡英和学院大学短期大学部教授）
「文芸批評家としてのギヤスケル」
パネリスト：杉村 藍（岡山県立大学教授）
「ギヤスケルが描く男たち——ブランウェル・ブロンテの描写を中心に」
パネリスト：瀧川 宏樹（大阪工業大学特任講師）
「人生のドラマを演出する——*The Life of Charlotte Brontë*における語り」
パネリスト：木村 正子（岐阜県立看護大学准教授）

16:05～16:30 総会

16:40～17:40 講演 司会：閑田 朋子（日本大学教授）
「Jane Austen 作品に見る“a fallen woman”——Peter Jenkins の悪戯を手掛かりに」
久守 和子（フェリス女学院大学名誉教授）

17:40～17:45 閉会の辞 日本ギヤスケル協会副会長 松岡 光治（名古屋大学教授）

研究発表

「近く、遠い過去——『克蘭フォード』の時代設定をめぐって」

『克蘭フォード』はギヤスケルの懐かしい思い出を下敷きにしているが、彼女の少女時代ではなく、1830年代後半から連載当時と同時期の50年代前半までを舞台としている。この時代設定を出発点とし、本発表ではこの作品が単にノスタルジーを刺激するものではないことを指摘した。

まずはブラウン大尉について考察した。彼は威厳ある人物だとされているが、その威厳はいわゆる軍人らしさではなく、他者への思いやりに満ちたものである。ホリー・ファーノウは、19世紀中頃から軍人は戦場の英雄ではなく、優しい人物として描かれるようになったと指摘しているが、ブラウン大尉はファーノウの言う新しい軍人像を体現する人物と言える。

このブラウン大尉の威厳はデボラやマティに影響を与えている。デボラはブラウン大尉の死後、威厳ある優しい態度で彼の娘を慰めている。また、マティは、自らの破産の危機の際に威厳のある態度で他者に施しを与える。彼女たちの慈愛に満ちた威厳ある態度は、都市部の商業社会の価値観へのアンチテーゼとして描かれている。『克蘭フォード』の中でギヤスケルは当時の読者に対して、非情な競争社会を生きる上で持つべき精神性を示しているのである。（村上 幸太郎）

シンポジウム「エリザベス・ギヤスケル『シャーロット・ブロンテの生涯』再評価」

ギヤスケルの『シャーロット・ブロンテの生涯』は出版直後、多くの人々から賞賛を浴びる一方で、伝記的事実が間違っているという指摘もされた。実際ギヤスケルはシャーロットを弁護するために、エジェ氏に対するシャーロットの想いを伏せたり、父親パトリックの奇癖を確かめもせず書いたり、多くの点で事実を歪曲したということは知られている。しかしそれでもなお、この伝記は今日まで読み継がれている。そこで現代において『シャーロット・ブロンテの生涯』がどのような意味を

持つのか、さまざまな角度から考察した。例えば、ジェンダーの問題をギaskellはどのように考えていたか、シャーロットの作品をギaskellはどのように評価していたか、男性をギaskellはどのように扱っているか、短編小説「灰色の女」との比較など、現代的視点からテキストを読み解いていくことで、この伝記がいかに時代を越えても優れた作品であるかを明らかにした。（芦澤 久江）

1. 『シャーロット・ブロンテの生涯』における読みの可能性

『シャーロット・ブロンテの生涯』は出版当時、多くの人々の共感を得ることができ、シャーロット神話を作るまでに至った。そこにはギaskellのさまざまな戦略が隠されている。例えば悲劇という物語の枠組み、手紙の扱い方、語りの手法などである。しかしこの伝記には現代に通じる大きなテーマであるジェンダーという問題が内包されている。ギaskellは当時の理想的な女性としてシャーロットを描きながらも、時にはシャーロット自身に大胆なフェミニズム的発言をさせたりしている。ところがギaskellのそのような曖昧な姿勢こそ、このテキストの読みを大きく広げている要因である。すなわち当時の人々はシャーロットを控えめで自己犠牲を厭わない理想的な女性として見なしたが、現代の読者はシャーロットをそのようにとらえたりしないだろう。実際 20 世紀になるとシャーロットはフェミニストのシンボルとして読まれるようになっていく。したがって『シャーロット・ブロンテの生涯』は時代によって、社会によって読みの修正がなされ、シャーロット像は大きく変容しているのである。（芦澤 久江）

2. 「文芸批評家としてのギaskell」

19 世紀は「伝記の時代」と呼ばれ、特に女性が文壇に登場するようになったことで、こうした女性たちを描いた伝記が急増した。やがてそれらの多くが忘れ去られる中で、ギaskellの『シャーロット・ブロンテの生涯』は現代にも読み継がれる伝記文学の代表的作品である。本発表では、ギaskellが小説家であるシャーロット・ブロンテの作品を伝記においてどのように評しているのかを通して、文芸批評家としてのギaskellについて考えてみた。

批評家としてのギaskellに注目して *Life* を読んでみると、彼女のブロンテ作品に関する記述が非常に少ないことに気づく。同じ小説家として彼女なりの考えや感想を持っていたはずであるが、ほとんど表現されていないのはなぜなのか。わずかではあるが *Life* の中でギaskellがブロンテ作品について触れている部分を抜き出し、さらに彼女の手紙に見られるブロンテ作品への言及を参考にしながら、文芸批評家としてのギaskellの姿を捉えるとともに、作中でなぜブロンテ作品に関する見解をほとんど述べていないのかについても考察した。（杉村 藍）

3. 「ギaskellが描く男たち——ブランウェル・ブロンテの描写を中心に」

本発表では、ブランウェルの描写を中心に、本作品でギaskellが意識していた男性問題を探った。従来の批評では、姉妹に迷惑をかけた男兄弟として、ブランウェルに対する批判的な印象が強い。しかしギaskellは、ブランウェルの墮落という点にまつわるブロンテ家の問題を、世間一般の男性問題として位置付けている。そして、周囲の盲目により甘やかされた結果としての墮落と位置付けることで、ブランウェルを弁護してもいる。

一方でブランウェルは、生計を得るという点を実践していないなど、男性としての義務を果たしていない人物としてもギaskellには映っており、この点では批判的に描かれている。

現代社会においてはあらゆる面で男性に強さが暗黙のうちに求められることによる、男性の生きづらさも指摘されている。男性優位の男性観によって負の影響を被るのは女性だけではなく、男性もまた負の影響を被ってしまっているという、現代の男性性の研究にも通じる問題を、批判しつつも弁護するというギaskellの曖昧な姿勢の中に見出すことができるのである。（瀧川 宏樹）

4. 「人生のドラマを演出する——*The Life of Charlotte Brontë* における語りの力」

本発表では、*The Life of Charlotte Brontë* (1857) における作家ギaskellの視点や手法に注目し、ブロンテの人生を語る際にギaskellがどのような演出を試みたのかを検証した。作中では、ブロンテ作品批判の対象である“coarseness”は、ハウースの土地柄や人間関係がもたらす過酷な状況が投影された結果であり、ブロンテは環境の犠牲者であるという点が強調されている。だが悪しき要素を周囲の人々に転嫁し、一部の記述にはギaskellの誤認もあって、本作品は第一版と第二版を撤回するという事態に至った。しかしギaskellは、語りの力によって人生を再構築することは可能であるという点に拘り、後の短篇小説“*The Grey Woman*” (1861) においては、虚構と真実の区別が重要なのはその関係者が生き

ている間のみという時限装置を仕掛けた。今日の読者がブロンテの伝記を読む時、問題の初版を好むのはまさにギャスケルの語りに関心を寄せるからではないか。その点からこの伝記執筆はギャスケルにとって、後の作品の布石を打つものになったと結んだ。
(木村 正子)

講演 「Jane Austen 作品に見る“a fallen woman”——Peter Jenkyns の悪戯を手掛かりに」

久守和子氏の本講演は、*Cranford* (1851-53) に登場する少年 Peter の悪戯を手掛かりに、Jane Austen における“a fallen woman”を論じるものであった。Austen の *Sense and Sensibility* (1811) に描かれた Eliza や *Pride and Prejudice* (1813) の Lydia、*Mansfield Park* (1814) の Maria Rushworth といった性的放縦を持つ女性たちを、ヒロインの陰の分身とする解釈は、非常に興味深いものであった。また久守氏は、Juliet MacMaster 氏の挿絵とともに、Austen 14 歳頃の家族向け作品“Love and Freindship” (sic) における老貴族と非嫡出の娘 4 人の子どもが偶然一堂に会する場面を紹介し、そのあつけらかんとした陰りのなさを指摘した。Austen と比較することで Gaskell の“a fallen woman”像に新たな光が当たる、知的好奇心を刺激し胸躍る講演であった。
(閑田 朋子)

大会レポート

第 33 回大会は、感染症予防のため昨年に引き続きオンラインにより開催され、41 名が参加し活発な議論が展開された。

大野龍浩会長の開会の辞の後、桐山恵子氏総合司会、榎本洋氏司会のもと、村上幸大郎氏の研究発表「近く、遠い過去——『クランフォード』の時代設定をめぐって」が行われ、『クランフォード』の 1830 年代後半から 40 年代前半という時代設定の中、クランフォードの町の人々が保有する、思いやりというような都市部のものとは異なる独特の価値観の言語での表出が読み取られ、経済の自由主義化が進む 1850 年代の商業主義社会を生きる当時の読者が持つべき精神性が提示されているという指摘がなされた。

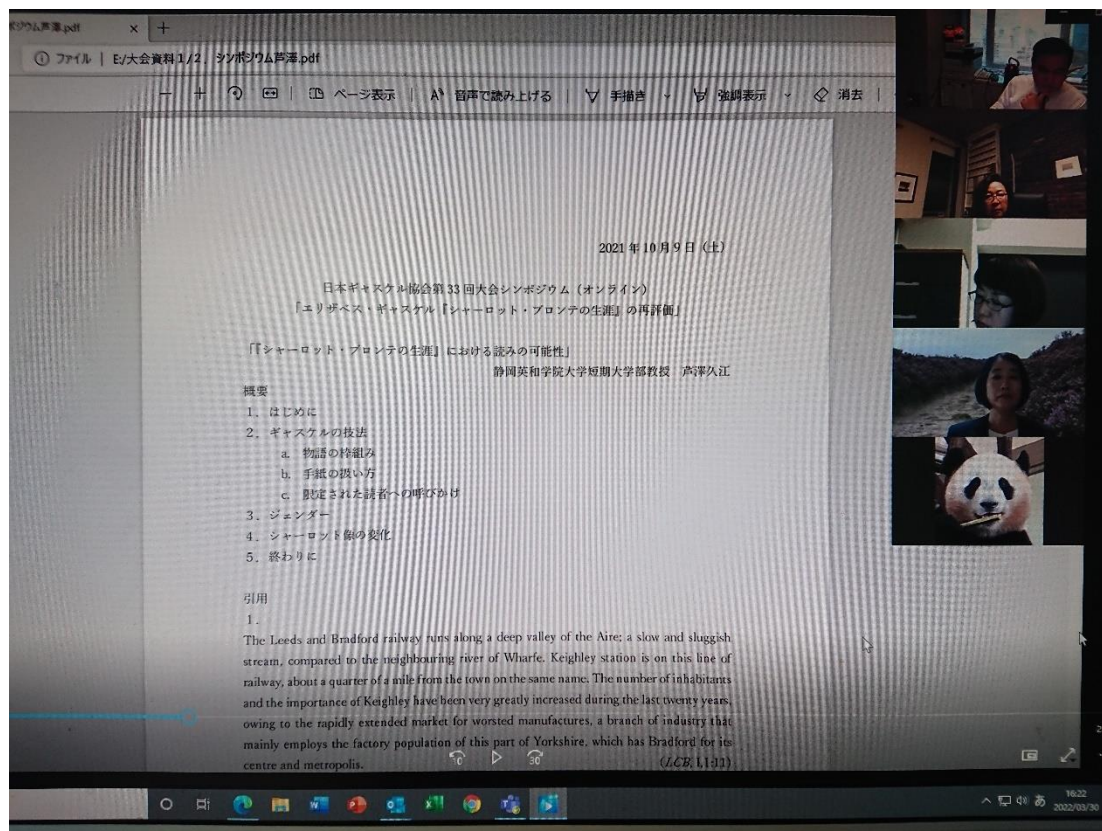
その後、4 名のパネリストによるシンポジウム「エリザベス・ギャスケル『シャーロット・ブロンテの生涯』再評価」では、従来にない観点からギャスケルによるブロンテの伝記の解釈が繰り広げられた。始めに司会も兼ねられた芦澤久江氏が『シャーロット・ブロンテの生涯』における読みの可能性において、ギャスケルは「シャーロット神話」を生み出すほどにブロンテの伝記を文学作品へと昇華させたが、ヴィクトリア朝時代の女性としてまた女性作家としてブロンテを描くことで矛盾とあいまいさが残され、その結果現代において作品の読みの可能性が広がったことを論じられた。次に杉村藍氏が「文芸批評家としてのギャスケル」において、ギャスケルはブロンテが作家としてだけでなくヴィクトリア朝の価値基準に合う女性としても尊敬されるよう伝記を執筆したが、その際ブロンテの手紙や作品等が選択され伝記に使用されたことはギャスケルの文芸批評家としての一面を示していること、また伝記がブロンテの作品解釈の重要な研究資料となったことを指摘された。続く瀧川宏樹氏は、「ギャスケルが描く男たち——ブランウェル・ブロンテの描写を中心に」において、ギャスケルによるブランウェルの描写は、ギャスケルが意識した男性問題すなわち男性に精神力や強さが求められることの生きづらさを論じることに繋がること、また批判の一方で見せるギャスケルのブランウェル弁護は、男性優位の男性観が男女ともに負の影響を与えるというギャスケルの思想に通じると考察された。更に、木村正子氏は「人生のドラマを演出する——*The Life of Charlotte Brontë* における語りの力」で、ブロンテの伝記執筆は、ギャスケルがカラー・ベルとジェイン・エアを同一視する読者への反論やブロンテの名誉回復という目的以外に、ブロンテの人生を演出することでギャスケルの作家としての姿勢を示したと指摘され、更に“Grey Woman”のアンナの語りとの比較も踏まえ、ブロンテの伝記では虚構と真実を分けてはいないものの、ギャスケルの語りの面白さ故に今日の読者は修正前の第一版に引き付けられることを論じられた。

総会開催の後、久守和子先生によるご講演「Jane Austen の作品に見る“a fallen woman”——Peter Jenkyns の悪戯を手掛かりに」が閑田朋子氏の司会のもと行われた。久守氏は J. Hassal の *Cranford* の挿絵とともにピーター・ジェンキンズが“a fallen woman”の偽装をし非嫡出子とも思える偽の赤ん坊を抱いた悪戯が喜劇的に描かれた *Cranford* と、悲劇的な“a fallen woman”を描いた *Ruth* の執筆時期が重なることを指摘された。

次にギャスケルより一世代前、摂政時代の Austen の“a fallen woman”の扱いについて論じられ、*Sense and Sensibility* の Eliza から *Pride and Prejudice* の Lydia、そして *Mansfield Park* の Maria Rushworth へ作品を追うごとにこれらの fallen woman と作品のヒロインとの関係性やその社会的地位設定などが緻密になり、問題が深刻化する様子を次々と例証された。

そして、Austen が 14 歳で執筆した “Love and Freindship” (sic) にある 4 名の貴族の血を引く非嫡出子が会する場面を Juliet McMaster の挿絵を交えて説明され、商業ベースで作成された前述の 3 作品とはかけ離れた喜劇的な世界が描かれていると論じられた。まさに “a fallen woman” の問題に喜劇性を見出しつつ、悲劇的な社会問題としてもとらえる探求心も有するギャスケルの想像力の豊饒さの先駆けとして Austen を再考できる貴重なご講演であった。

最後に閉会の辞が松岡光治副会長により述べられ、その後オンラインでの座談会が開かれ全国の会員同士の親交が深められた。(太田 裕子)



日本ギャスケル協会役員会報告

- 1 第一回役員会 (2021年10月8日(金)20時~21時 オンライン Zoom)
 - ① 『ギャスケル論集』
投稿論文4本(シンポ2、研究発表2)、書評3本、多比羅先生追悼文5本。
 - ② ニュースレター
前号は多比羅先生の追悼のこともあり若干発行が遅れた。
 - ③ 会員動向
会員数は77名(新入会員3人、退会者3名)。
 - ④ 19世紀合同学会
19世紀合同学会(9月18日開催)について、120名を超える参加者がいた。今後については各学会の会長が会議で話し合っていく。
 - ⑤ 2020年度会計報告、2021年度予算案が承認された。
研究会費の3,000円は、現在はZoom開催のため、費用は生じていないが、今後万が一、対面開催に切り替わることも踏まえて計上。
 - ⑥ 役員改選
会長の任期は1期2年で2期まで。2期目を継続の場合、慣例により選挙は行わず、役員会です承後、総会で承認を得た。
第17期で退任の役員(敬称略) → 松岡光治、宇田和子、遠藤花子、玉井史絵、西垣佐理

第18期の役員（敬称略）

会長 大野龍浩（17, 18）
 副会長 閑田朋子（18）
 事務局長 芦澤久江（17, 18）
 幹事 石塚裕子（18）、大前義幸（18）、木村晶子（18）、桐山恵子（18）、齊木愛子（17, 18）、
 杉村藍（18）、鈴木美津子（18）、瀧川宏樹（17, 18）、松本三枝子（17, 18）、村山晴徳
 （17, 18）

会計監査 猪熊恵子（17, 18）、早川友里子（17, 18）

- ⑦ 2022年度大会 日本赤十字看護大学（遠藤先生）10月1日（10月の第1土曜日）予定
 ⑧ 2023年度大会 同志社大学（玉井先生、桐山先生）10月8日（日）を第1候補にして調整。
 ギャスケルの大会は原則10月の第1土曜日とする。
 次年度の大会以降、ハイブリッド方式（機材とテクニックが必要）についても検討。

2 総会報告（2021年10月8日（金）16時5分～16時30分 オンライン Zoom）

- ① 2020年度会計報告、2021年度予算案が承認された。
 ② 第18期役員が承認された（上記参照）。

事務局報告（2020年度）

2020年度日本ギヤスケル協会会計報告

2020年度一般会計予算案

収入		支出	
前年度繰越金	726,363	通信費	50,000
年会費	475,000	大会費	100,000
（英国協会費を含む）		印刷費	150,000
		事務費	10,000
		英国協会費	125,000
		研究会費	3,000
		（小計）	(438,000)
		次年度繰越金	763,363
合計	1,201,363		1,201,363

2020年度一般会計決算

収入		支出	
前年度繰越金	726,363	通信費	30,534
年会費	363,000	大会費	30,000
英国協会費	90,000	事務費	23,032
		印刷費	96,800
		（小計）	180,356
		英国協会	89,383
		次年度繰越金	909,624
合計	1,179,363		1,179,363

上記の通り相違ありません。

日本ギヤスケル協会 2020 年度事務局長	芦澤久江 ㊞
日本ギヤスケル協会 2020 年度会計監査	猪熊恵子 ㊞
日本ギヤスケル協会 2020 年度会計監査	早川友里子 ㊞

2021 年度一般会計予算案

収入	(内訳)	支出	
前年度繰越金	909,624	通信費	50,000
年会費	468,000	大会費	150,000
		印刷費	180,000
		事務費	11,000
		英国協会費	74,000
		研究会費	3,000
		(小計)	468,000
		次年度繰越金	909,624
合計	1,377,624	1,377,624	1,377,624

◆ 日本ギヤスケル協会 第 34 回大会 予告 ◆◆

10 月 1 日 (土) 於：日本赤十字看護大学

総合司会 矢嶋瑠莉 (北里大学講師)

●開会の辞 13:00~13:05 日本ギヤスケル協会会長 大野龍浩 (立正大学教授)

●研究発表 1 13:05~13:35 司会 松浦愛子 (釧路公立大学准教授)

中越亜理紗 (東京大学大学院博士課程)

“China’s Earth and Indian Leaf”: Asian Commodities in Elizabeth Gaskell’s Condition-of-England Novels

●研究発表 2 13:35~14:05 司会 矢野奈々 (北里大学専任講師)

星 志乃 (早稲田大学助手)

「ギヤスケルとジョージ・エリオットが描いた disability」

●研究発表 3 14:05~14:35 司会 矢次綾 (松山大学教授)

早川友里子 (大妻女子大学専任講師)

「エリザベス・ギヤスケルの短編における「堕ちた女」の表象」

●総会 14:45~15:15

●講演 1 15:25~16:25 司会 木村晶子 (早稲田大学教授)

松本三枝子 (愛知県立大学名誉教授) 「エリザベス・ギヤスケルと煽情小説」

●講演 2 16:35~17:35 司会 金山亮太 (立命館大学教授)

石塚裕子 (神戸大学名誉教授) 「イギリスと日本の社会小説雑感」

●閉会の辞 17:35~17:40 日本ギヤスケル協会副会長 閑田朋子 (日本大学教授)

★ 次年度研究発表を募集しております。お申し込みは 12 月末日までに事務局へメールにてお願い申し上げます。

◆◆◆研究会予定◆◆◆

ギャスケル作品の読後感を自由に語り合い鑑賞する研究会です。今年度は以下の作品を取り上げる予定です。

作 品：2022 年 3 月 13 日 *Ruth*, Chs. 19-24: 太田裕子
5 月 8 日 *Ruth*, Chs. 25-30: 大野龍浩
7 月 10 日 *Ruth*, Chs. 31-36: 芦澤久江
9 月 11 日 *Cranford*, Chs. 1-4: 長浜麻里子
11 月 13 日 *Cranford*, Chs. 5-8: 関口章子
2023 年 1 月 8 日 *Cranford*, Chs. 9-12: 村上幸太郎
3 月 12 日 *Cranford*, Chs. 13-16: 木村正子

日 時：奇数月 第 2 日曜日 午後 2 時～午後 4 時

※ 原則として Zoom による開催。日程等に変更がある場合は、日本ギャスケル協会 HP に掲載いたしますので、新着情報をお確かめ下さい。皆様のご参加をお待ち申し上げます。

.....編集後記.....

2021 年度もやはり、新型コロナウイルス感染症に振り回された 1 年だったと言わざるをえません。1 年に 1 回となった日本ギャスケル協会の大会もここ 2 年はオンライン開催となっております。大学の授業も学会もオンラインが定着しつつある昨今ではありますが、2022 年度こそは、対面で顔を合わせ、「ご無沙汰しております」「お元気でしたか」と会話ができることを願ってやみません。

最後になりましたが、編集にあたりご協力下さいました大野会長をはじめ、松岡副会長、閑田新副会長、芦澤事務局長、ご執筆下さった方々に心より御礼申し上げます。（編集：遠藤花子）

発 行： 日本ギャスケル協会

〒422-8545

静岡市駿河区池田 1769

静岡英和学院大学短期大学部

芦澤久江研究室

URL: <http://www.gaskell.jp/>

e-mail: ashizawa@shizuoka-iwa.ac.jp

発行日： 2022 年 5 月 4 日